アドルノによる「ゲオルゲの救出」

伊藤　壯

テオドール・W・アドルノの「ゲオルゲとホフマンスタール」と題されたエッセイ(『プリズム』(1955)に所載)は，そもそもこの両詩人の往復書簡集の刊行(1938年)に際して，その書評を意図して書かれたものである。当時ナチス政権下のドイツを逃れ米国に亡命していたアドルノは，1940年初頭，こちらは陥落寸前のパリで窮迫の亡命生活を送るベンヤミンのもとへとその大部の草稿を送り渡すのだが，詳細な論評を込めた返信においてベンヤミンは，それが，一見もはやアナクロニスティックで専門的に過ぎるトピックを扱っていながらも，世界史的な視座に基づいた勝れてアクチュアルな批評となっているのだと述べつつ，続けて次のように評するのである：「あなたは，ゲオルゲの〈救出〉というこの時宜に反した割に合わない課題を，あり得る限りの説得力と必要不可欠な節度とをもって成し遂げたのだ」と。救出のモチーフがこのふたりの思想家にとって重要な課題であったということを踏まえた上で，本発表の意図はしかし，その救出の有無や是非を問うものではなく，「救出」の対象がゲオルゲであるとは，またその運動がきわめて反時代的で不毛な形をとるとは，どういうことを意味するのかということをただ検証することに置かれる。

若き日のベンヤミンがゲオルゲの詩に傾倒していたことは少なからず知られていることだが，その痕跡は，当時の彼の書簡などに直接見受けられるだけでなく，その少年期の愛惜を断ち切った後のゲオルゲ・クライスに対する彼の苛烈な批判を含む評論において，とりわけ彼の二篇のゲオルゲ論に激しい相克のドラマを孕んだ形で刻み込まれている。他方，その文芸批評において特にベンヤミンからの影響が端々まで窺えるアドルノにとってのゲオルゲはしかし，ベンヤミンの場合のように両極間を烈しく往還する明瞭な構造は持たず，それゆえ批評対象への態度が分かり辛くなっているようでもある。ただ，その詩の作曲までしているアドルノもゲオルゲ作品には通暁しており，とりわけこのエッセイにおいては，ホフマンスタールの作品とともに適宜にあらゆるゲオルゲの詩・散文が召喚され，アドルノはただテキストの海へと沈降していくのである。しかもその際，ナチスのイデオロギーを準備した張本人としての反動的蒙昧主義者といった当時の常套的なゲオルゲ像に同調することは徹底して避け，のみならず正反対の事例をアイロニカルに挙げてみたりもする。しかしこのエッセイにまずもって特徴的であるのはその文体と形式であり，非体系的に蜿蜒と連ねられた韜晦な文のうちで批判される側と擁護される側が目まぐるしく入れ替わり，一見堂々巡りをするようでいながら不可触の焦点をまさぐろうとするさまこそに，彼がここで唐突な結論めいて投げつける「限定的否定」の身振りが投影されている。さらに，そもそもゲオルゲのうちに言語の境界を常に侵犯し続ける翻訳者／革新者としての特性が秘められていたことをも考え合わせるのならば，なおのことこの沈潜と迂遠の極みでアドルノが掬い／救い出そうとしたもののうちに，むしろ世界史的な現在性を見出せよう。